

統一閣復興資金募集要項

- 一、建築計書
- 一、木造貳階建 間口九間半、奥行十四間四尺五寸
建坪階下平面坪百四拾四坪餘、階上準之、建物高
サ最高部參拾七尺
 - 一、内部各室ノ大様左ノ如シ
大講堂講演席 八坪餘
聽講席 階下五拾餘坪
階上參拾餘坪
小講堂階上拾八坪（疊敷）
法要室階下拾八坪
事務室其他九室
廻廊 階下 貳拾貳坪
階上 貳拾六坪五合
便所 階下 四坪五合
階上 四坪五合
 - 一、正面建圖及各室ノ配置ハ別圖ノ如シ
（別圖ハ省略ス）
- 一、建築着手期
大正十三年一月十六日
- 一、全竣工期
大正十三年三月三十日落成式舉行
- 一、建築費豫算

- 一、金參萬五千圓也 建築購入費
 - 一、金千七百五十拾圓也 基礎工事費
 - 一、金五千圓也 内部改造費
 - 一、金參千圓也 諸器具等設備費
 - 一、金貳千貳百五十拾圓也 諸雜費
- 合計金四萬七千圓也
- 一、喜捨金ハ募集ノ豫定金額及ヒ募集ノ期間ヲ定メズ
 - 一、喜捨金額ハ各自ノ任意トシ其捻込ノ方法ハ一時金
數回分納、月掛等モ各自ノ任意ニ依ルモノトス
 - 一、喜捨御申込ノ際拂込ノ方法ヲ申出ラレタシ
 - 一、喜捨金ハ振替口座「東京壹貳壹九番」統一團ニ拂
込ヲ便宜トス
 - 一、喜捨金募集ニ關スル事務ハ當分ノ間東京府下雜司
ヶ谷本教寺内統一團總務并村日成ニ於テ之ヲ取扱フ
- 以 上
- 大正十三年一月
- 東京市淺草區北清島町十三、四、五番地

統一團



統一

思想の根本問題

本 多 日 生

大正十三年二月十二日愛知縣會議事堂の又古屋自慶會主催民風作興講演會に於て

一、緒 言

我々人間は思想の生物下であります、外の動物と違つて居るのは思想を持つて居るからである。併し乍ら其思想が良ければ人間は非常に立派なものであるが、悪ければ虎や狼よりも恐ろしいものである。人間の價値は其人が持つて居る所の思想の如何に依るのであります。假令地位が高からうが、學問があらうが、金があるらうが、又立派な仕事をしたやうに見えても、其人が抱いて居る所の思想が悪かつたならば、閻魔法王の裁きの前に於て罪人であります、思想ほど大事なものはありません。

諸君、御釋迦様は偉い方である。何うして偉いのであるか、御釋迦様の持つて居つた所の思想が正しいからである。彼は善い事を考へ、正念不動三昧に入つて、遂に正覺を成就し、其正しい思想を繼續無盡に説き示して、其教化が今

猶ほ盡きない。其正しい思想の卓越が、彼釋迦を世界に於ける第一人者としたのである。諸君、大日本帝國が立派な國であると御互が誇つて居るのは何であるか、富士の山があるから立派だと云ふて居るけれども、夫は象徴して云ふのであつて、山だけを誇として居るのではない、山の奥に隠れて居る所の國民の思想が、富士の山よりも立派であると云ふ事を象徴して、富士を誇として居るのである。富士の山のみ立派にして、國民の思想が衰へて居る、濁つて居ると云ふ事であつたならば、何も富士の山を誇る事は出来ない、日本の國の誇は日本の國民の持つて居る所の思想でなければならぬ。

夫れ故に今日はいろ／＼大切な問題が横はつて居るけれども、彌が上にも國民の思想を善くして、然うして我々民族の誇を彌が上にも發揚して行かなければならぬ。

くけれども、ソコに大きな二つの悪い事が現れて来た。一は浮華放縱と云ふ、人格の上に於てふ／＼したやうな取止めの無い考が起り、今迄定つて居つた或は道德、或は宗教、其他善良なる風俗習慣として守らなければならぬ事柄を弾きつけて、そんな事は何うでも宜しい、私は私の勝手ですと云ふやうな、放縱氣儘な風が非常に盛んになつて来たのである、學問が開け人智が進むに拘らず「浮華放縱の習漸く萌す」と云ふのは、是は實に一大事である。人間が馬鹿になつて、教育も與へなければ、打棄らかして置いて遂につまらぬ者が出来たと云ふ事であれば、怪しむに足らないけれども、學問が盛んになり、賢うなつて行くのに、ふわ／＼した人間が増えたと云ふ事は實に容易ならざる事でありませぬ。もう一つは何であるか、「輕佻詭激の風も亦生す」と

ればならぬと思ふ。所が事實は之に反して、國民の思想が悪くなりつゝある、夫は私が申すのではない、事實であります。諸君、今度の詔書を拜して何う云ふ感しを御持ちになりましたか。いろ／＼結構な御示がありますが、中に就て殊に心ある國民の精神に大刺戟を與へられて居るのは「輕佻學術益々開け、人智日に進む、然れども浮華放縱の習漸く萌し、輕佻詭激の風も亦生す、今に及んで時弊を革めずんば、或は前緒を失墜せん事を恐る」と仰せられて居る點であります。是は何う云ふ事でありませぬか。輕佻學術益々開け、人智日に進む、然れども浮華放縱の習漸く萌し、輕佻詭激の風も亦生す、今に及んで時弊を革めずんば、或は前緒を失墜せん事を恐る」と仰せられた、我々國民は如何に考へて良いのでありますか。學問は開けて行く、人間は賢うなつて行

云ふ、輕佻と云ふ事は即ち思想の事でありませぬ、大事な思想の事柄を取扱つて行くのに、輕はつまぬ考を以て十分に其事を考へないで、輕々しく間違つた事でも、悪い事でも、値打のない事でも夫に流れて行く、詭激の風と云ふのは、然う云ふ説が大にしては國家を覆へし、耐會を盡毒し、民族全體の幸福を破壊せんとするやうな、恐るべき事をも取入れる事に相成るのである。此人格は腐り、思想は悪くなる」と云ふ事が、學問が開け人智が進む中に於て發生したのは、是は容易ならぬ事であるから、時弊を矯め直さぬ限りには、日本の國の前途は或は危ふからんと云ふ事を仰せられたのであります。此處です、之を他人事として考へてはいけない、諸君、唯今私の申す事は決して學問を攻撃するとか、教育を攻撃するとか云ふやうな意味で申すものではありません、

誰が悪い、彼が悪いと云ふやうな小さな事を論じて居るのではありません、今日の此嘆かはしい輕佻説激の風を生じた根本は何處にあるか、學問が開け、人間が賢ふなるに拘らず、此恐るべき結果を招いた事に就ては、其原因を探究して、之を除く事に努めるのが國家に忠なる所以であること考へるのであります、夫に就て斯やうな結果を來した根本を論明して、諸君の御批判を仰がふと存するのであります。

二、短見と偏見

是は六ヶしく論じますと中々面倒な問題でありますけれども、成るべく平易なる方法に於て、此問題論議して見やうと存じます、私の考へる所では、今日の文化の風潮が物事を判断するに就て、淺い見方が流行つて來た事が一つ、物事を判断するに偏つた方から判断する弊害が一つ、一部分から見ると全體

と存じます。

諸君、物事は深く見透さなければならぬ、又其全體を観察しなければならぬ、碁を打つに就て考へても然うであります。ソコに争ひが起つて居ると云ふ、二手三手位の事を考へて碁を打つて居る者は初心な碁打である、本當に好い碁打でありますれば、夫れから夫れへと相手も幾手も考へまして、千變萬化する所の手を考へて、此處に初めて一目を下すのである。先般本因坊第一世の三百年祭がありまして、全國の有數なる碁客が凡て京都に集りました、其際に今の本因坊秀哉先生と、東京の有數なる碁客とが、第一世本因坊の畫像の前に於て對局したのであります、其時私は夫に立會はなければならぬ關係でソコに列席をしました、本因坊第一世と云ふのは日蓮主義の坊さんでありまして、日海上人

を論断せんとし、皮相から見ると其事を判断せんとする所の、此偏見と短見と云ふ二つが途に今日の弊害を招いたものであらうと存じます。何を淺く物を見るかと申しますれば、大體「人間の感覺的智識」と學問の方では申しますが、餘り十分物事を調べ上げる智識のない者が、上ツ面から見て物事を判断する、然う云ふ淺はかな量見の者を煽て、低級なる者の歎心を買ふて、一切の判断を遣つて行かうとする、諂ねる風潮が起つて來たのは、現代の腐つて行く根本を爲したのであるまいか、もう一つは偏る所の考へてあります、是も現代の文化の潮流が、自己の學ぶ部分々々の學問智識に没頭しまして、其狹い智識より人生を判断し、或は文化を判断せんとする爲め、ソコに間違つた判断が起つて參つたと存するのである。此事を目標として議論を進めて行きたい

と云ふ人があります、私の支配して居る寺院の關山であるが故に私共は立會つたのであります、夫で私は二人の對局して碁を打つ有様を見て、私は素人乍ら感じた事があります。初めに東京の七段の人が黒の一目を置くのであります、碁盤中全面が空いて居るに拘らず、對局してから七分の間チツと考へて居りました、漸くにして一目をボンと置いた、本因坊秀哉が、其邊はふんな空いて居るのであるから、何處へでもボンと打てば好いのであるのに、又約八分間ばかり経ちまして一目を打つた、然うすると又相手の方が夫を考へて居る、何うも初めの何の支障の無い所の、全局面が空いて居るのに拘らず、一目を下すのに就て左様な時間を要すると云ふ事は、深く考へてジツと一切を組立て、から行くのである。長い時間がかかつては兩方石を置かず、漸く二十八

目を打つて其日は終つたのであります。之を考へる
と云ふと、甚でも強いと云ふ人は餘程其事を深く考
へて、然うして一石を下すのである。又全面を考へ
て遣つて居ると云ふ事が分つたのであります。下手
な基打は一部分からして、淺く考へる、ホイ來た〜
と云ふ、斯う云ふ譯であります。我日本の國が開か
れて來る根本には非常に貴い事がありまして、天
照大神様が國家の大事と云ふ場合には必ず思兼神
様を御呼出しになつて、夫に御尋ねになつて居る、
是は我國の建國の歴史に於て非常に大切な點であり
ます。山鹿先生の中朝事實を見ますと、此思兼神
様と云ふ事に就て詳しい説明が與へられて居る。思
ふとは思慮深遠と云ふ事であり、思ひは深しと
云ふ事で、思兼神と云ふのは其問題に就て深く深
く根柢に就て考へるのである、思ふと云ふ字は思慮

のも同じであるが、偏らない所の中正の精神と、
物事を厚く深く徹底して考へて行く精神とが缺けて
居るから、上辺りで部分的判斷をして、爲に一切の
事に間違ひが起つて來たのである。

三、短見の一例

一例を申し上げますが、例へば昨秋の關東大震災
に就ては、大地震大火山があつたのは、是は天意か
ら日本に警告を與へられたのではないかと申して居
る人も段々あるのであります。其反對に地震は地
球の收縮に依つて地層が辻つたから起つたのである、
是から後でも時々ある事である、地震のある事を忘
れて建築に注意を怠つたから家が倒れた、慌て、逃
げ出して火を消さなかつたものであるから、又水道
だけを頼りにして居つたものであるから、夫で火事
がよけいにいつたのである、夫で人が死んだのだ、

で、思慮とは思慮深遠である、兼ると云ふのは包容
廣大であつて、兼合せて物事を考へ給ふが故に、兼
ねるとは包容廣大と云ふ事である、思慮深遠、包容
廣大、而して一の事柄に決定を與へるのに、深いと
云ふ事と全體と云ふ事が、日本の國の一切の掟とな
つて來る根本を爲したのであります。夫れ故に日本
の歴史に現れて來て居る事柄は、表面一寸見れば何
でもない事でも、深く考へると非常に意味が深い、
教育勅語には「國を肇むる事宏遠に徳を樹つる事深
厚なり」と仰せられて居る、宏遠と云ひ、深厚と云
ふ字は薄つべらではいけない、一部分ではいけない
と云ふ事で、深く廣く考へて行く所に日本の美風が
成立つのであります。今度の詔書にも「輕佻詭激を斥
け、醇厚中正に歸し」と御示しになつて、醇厚と云
つて厚いと云ふ字で現すのも、深いと云ふ字で現す

何にも天の精神が恐い、そんな事は考へないが宜し
い、將來地震の起る時に善處する途を考へるが好い、
耐震耐火の建築を遣り、道を廣くし、ポンプを買つ
て井戸を掘つて置くが好からうと云ふ風に考へるの
であります。夫は無學問ではありませぬが、夫で

終り、斯う云ふ事になりますと云ふと、今度の地震
災も、唯家の建て直し、ポンプの備へ直しと云ふ事
で話が済む次第でありますけれども、……其方が一
寸氣が利いたやうに考へられる、地震が起るのは地
球の收縮に依つてであるとか科學の智識でナヤンと分
つて居る、豫知する事は出來ないが、地震其ものは
學問で分つて居る、然う云ふ事で「ヒヤ〜」と云
ふ事になりますと、地震は科學の智識で以て認めて
居る、夫を恐がつたりするのは迷信である。斯う云
ふやうな事で、非常に好く分つたやうに見えるが、

即ち是が物事を深く解釋すると云ふのである、其事
が間違ひではないけれども、夫で終りつと云ふ事になつては、弊害を生じて來ます。夫れだから災害後に就て大變人心が引締つたやうであつたが、今日は又忘れ去つたやうな工合で、災害以後の民衆の心理變遷と云ふ事を學者達が研究して居る所に依り、まず、災害後一ヶ月は各地の同情も湧くが如く、人間の美しい精神が現れた、災害に出會つた者も非常に緊縮した精神に立歸つて、御互に相助ける、握り飯があれば御上りになりませんか、澤庵があれば一切れ上げませうかと云ふやうな譯で、實に美風が起つたけれども、一ヶ月経ちますと、もうそんな事は云ふて居ない、取りたいだけ取らなければならぬ、斯う云ふ時にブツタクルのはブツタクル徳だと云ふやうな譯で、殆んど災害以前に幾倍した、人心は惡

せられて居る、陛下すらも憂懐交々至ると仰せられて居るのに、國民の方は心配も一時で消えましか、初めから恐懼杯は致しませぬと云ふ事になる。然うなつたならば國民の精神は決して緊張もせず、改つても來ないのであります、他人事のやうに考へて行くのであります。國民凡てが——陛下は憂懐と云ふ事を仰せられたが、何の皇室に御咎めがあらうぞ、罪、國民にあるに違ひない、畏れ多い次第である、陛下自ら憂懐交々至ると仰せられたのに、國民が素知らぬ顔をして、私共は何の責任もございませぬと云ふて濟む譯のものでない、深くこの詔書を拜して感激し恐懼し戒懐すべきであります。夫を憂と云ふ字は憂ふると云ふ字だ、懐と云ふ字は恐るゝと云ふ字だ、終りつ——斯やうな事になりますから、人心と云ふものが作興しないのであらうと存じます。

い傾嚮を辿つて居ると云ふ事を聞くのであります。夫は何處から來るか云ふと、地震を深く解釋して置くから、一ヶ月で終りつと云ふ事になつて參ります、夫では何うしても本當の反省も起らず、國家の興隆も期する事が出來ないからして、詔書の中には「俄かに災變に遭ひて憂懐交々至れり」と御示になつて居る、今度の大災害に出會ふて國家の爲め心痛に堪えない、唯心配するばかりではない、何か是れは落度があつて、祖宗の神靈の思召に契はぬのか、天地神明の心に契はぬのか、何かソコに改めなければならぬ事があつて、斯う云ふやうな事が起つたのではあるまいかと、陛下自ら恐懼遊ばされたのを憂懐と申すので、シヨは懐ると云ふ字を書いて、心配する事と、恐れを抱く事の二つが交々至ると仰せられ、心痛に堪えぬ、恐懼に堪えぬと云ふ事を仰

是は唯だ一つの例として申すのであります、然らば全體の問題としては何う云ふ事が淺いと云はれ、偏つて居ると云はれるかと申しますれば、實に問題は多い事でありませけれども、有ゆる問題に亘ると却つて要領を得なくなりませから、二つの大切な問題を擧げて此事を明かにして見たいと存じます。一は人生觀に就てであります、一は國家觀に就てであります。

四、人生觀の徹底

私が見る所では現代の傾嚮は人生觀が極めて淺薄であり、極めて偏見である。又國家觀が淺見であり、偏見であるやうな傾嚮を辿りつゝあるのではなからうかと思ふ。夫は何う云ふ事を申すかと云ふと、此人生を見る事が淺いと、人間と云ふものは衣食住の慾望が盛んになつて來ます、何でも人間は愉快に暮

さなければならぬ、所謂放縱享樂と云ふやうな考
 が起つて来て、然うすると贅澤をするやうな事が目
 的になつて来ます、幾分でもよけい儲けて、甘いも
 のを喰つて、贅澤をしやう、然うして人間の享樂を
 恣まゝにしやうと云ふ事が非常に強い力を以て起つ
 て来ます、深い所を考へないで、人間死んでから先
 杯はあるかないか分らない、善い事をしたつて、悪
 い事をしたつて、そんな事は誰も見て居ない、善い
 事をして、悪い事をして死んで行くのである、
 然う云ふ風になると、腹の底で自分が考へるのは、
 幾分でもよけい儲けて、餘り儲かないで、甘いもの
 を喰つて、贅澤をして、ソコを宜しく遣つて行くこ
 と云ふ事が、巧妙なる世渡りである、云ふやうに考へ
 られて来ます、然う云ふ説明はしないけれども、事
 實然う云ふ思想を取るものである、——そこで私が唯

今申すやうに人生觀に就て淺い考を持つと云ふと、
 夫が根柢を爲して人心を腐敗し、社會の現状がいろ
 〱混濁をして參るのである、故に何うしても現代
 の疾を救ふには、一遁りの學問や、一遁りの智識で
 はいけない、人間が世の中に生れて来て生涯何う云
 ふ考を以て生くべきかと云ふ、人生觀の哲理を明か
 にしない限りは、現代の病氣は救はれないと思ふの
 であります。夫で此人間に就て六ヶしく論ずれば長
 い話であるが、唯今の衣食住の慾望を満たし、放縱
 なる生活をするに云ふのでは、人生觀は間違つて居
 ると私は思ふ、人間が世の中に出て来た目的、夫れ
 自身は平凡なる人間には分らないが、其事を熱心に
 研究した所の聖者哲人、或は佛様、或は聖人と云ふ
 やうな我々の先覺者が説く人生觀を適はして見た所
 によると、唯喰つて寝て好い加減に人生を送りたい

と云ふ様な事を云つた者は一人も居ない、今日の多
 くの人が考へて居るやうな事は、聖人の前に行つた
 ならば叱られる、佛様の前に行つても叱られる、神
 様の前に行つても叱られる、此量見は何うしても直
 さなければ駄目だと云ふ事になると思ふのでありま
 す。夫であるから屁理窟を云ふて居る學者は何う云
 ふか知らないが、然う云ふ低い學問や人智と云ふも
 のを超越して、萬世の師表となるやうな偉人哲人聖
 者賢人先哲の前に於て我々は人生觀を學ばねばなら
 ない。然うすると此人間の世に處して行くに就ては、
 無論まるつきり自分の樂みを捨てるに云ふ事は出来
 ないが、樂みの性質を吟味して行かなければならぬ
 いのである。唯喰つたり飲んだりする、然う云ふ外
 に樂みがないと云ふ事は、是は其人が間違つた考を
 持つて居るのである。人間は喰つたり飲んだりする

以外に、精神の幸福、精神の樂みと云ふものを持つ
 て居るのであります。道を以て樂みを受け、法を以
 て樂みを感じて行く、斯う云ふ人が高等なる精神生
 活をする所の能力を持つて居るのであります、夫れ
 故にソコの所を忘れぬやうにしなければならぬ。
 ソコの所を考へると、人間の一番大切なものは道徳
 である、云ふ事が分る。喰つたり飲んだりする事よ
 りは、人の人たる道を守り、道を行ひ、道の中に樂
 みを受け、道と終始する、道と共に終りに達すると
 云ふ事が、人間の心得と相成つて來るのであります。
 此決心であります、道に志し、道を守り、道を貴び、
 道と共に進退する、此一つが人生觀の中に盛んにな
 つて来たならば、今日の所謂輕佻浮薄の弊害は、必
 ずや矯正されて來るに相違ないのである。小さな事
 をいろ／＼云ふけれども、徹底して道を重んずる觀

念——所謂道念を捕へないで、低い觀念が跋扈するから、斯やうな事に相成るのである、茲に於て道德の重い事が分るのであります。

普通の場合には國家を盛んにして行くのは富である、國家を盛んにして行くのは武力である、國家を盛んにして行くのは政治である、國家を盛んにして行くのは交通である云ふ、唯形を以て多くの人は考へて居るけれども、——無論其事も必要であるがヨリ大切なものは國民の精神であります、そして其精神とは道德的教化を受けた所の立派な精神でなければならぬ。夫れ故に「國家興隆の本は國民精神の剛健に在り」と仰せられた。其國民の精神とは何う云ふ精神であるかと云ふに、是れ皆道德を尊重する所の精神であります。今日は一切が享樂主義になり、經濟に重きを置くやうになり、形に重きを置

くやうになつた、あの人は偉い、金を持つて居るから、位を持つて居るからと云ふ事で、夫れを以て其人を偉いやうに思ふて、其人の道德的生活を以て其人を見ないやうになつて來ましたが、これは間違つて居る。

大僧正本多日生現下講述

國民精神作興の詔書を拜して

本誌特別號として發刊しました。宣傳本用に好平の讀物と信じます。特價拾部金壹圓(稅共)の割で御頒ちします。殘本僅少、品切れにらぬ内に御申込下さい。

大僧正本多日生現下講述

國民精神の涵養

第五十四版發行

國民精神作興の詔書の要綱を講述せられたるもの、
一部金五錢、百部參圓五拾錢(送料共)

名古屋市東區田代城山

統一編輯局

電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

うるの奥山今日越えて

本多日生

それでこの「いろは」歌は何處から出て來たかといふと、これは佛教全體の大乗の思想であるが、併し直接これがあらはれて居るのは、大涅槃經の、雪山童子が、鬼から聞いたといふ十六文字のあの教がこの「いろは」歌に翻譯をされたのである。即ち初めの「いろははへど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ」といふ前段は、

諸行無常是生滅法

といふ八字の偈の意味である。「諸行は無常なり、是れ生滅の法」——諸行といふのはいろ／＼に現れて居るところの現象のすべてを言ふので、山でも川でも人間でも形あるところの現象世界のものはすべて

之を佛教では諸行と言ふ、その諸行は無常といつて、山でも川でも皆壞れて行くのである。その意味は阿含經などによく説いてあるが、大海も亦灰となつて飛ぶといふ言葉がある、素人が考へると、大海が灰になつて飛ぶナンテ狂人のやうな事を言ふと思ふけれども、それは山も川もみな劫燒といふ大きな火に依つて燒かれて、その熱のために水分が蒸發してしまへば、即ち星雲といつて——これは今日の科學の方の研究から言つても考へられて居る通りに、夏などひでりが續く時分に空に赤いやうな雲が出る事があるが、あゝいふやうな状態にこの地球もなつてしまふ。さうなれば山も海もあつたものではない。

人間などは無論生きては居られない、皆一つに鎔けてドロ／＼になつてしまふ。それが又或る年代を経でだん／＼冷却して固まつて、さうしてそこにいろいろの生物が生じ、吾々人間も生活するやうになるのである。それは西洋の科學の研究でもさういふものぢや。だから大海も亦灰となつて飛ぶといふ位に佛敎では教へて居る、如何なる物と雖も、眞の眞在の世界でない限りには皆壞れて行くのである。お自我偈に「衆生劫盡きて大火に燒かるゝと見る時」といふのは、この世界が燒かれて星雲になる時である。而も佛の世界は「我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり」といふのは、この有限世界は灰になつて衆生時でも、佛の世界は安穩の淨土、實在の世界がそこに在るといふことを教へたものである。さういふ意味がわからなかつたならば、お自我偈もわから

ず何もわかりはしない、今の猪みたいな人間は、佛敎の一頁も分かつて居ない、諸行無常の意味がわからなかつたならば、佛敎の門に入ることは出来はせぬ。これは佛敎の教化が衰へたからこんな事になつたのである。こんな話は「いろは」歌に現れて居る位だから、佛敎の幼稚園の話ぢや、「諸行は無常なり」で、形あるものは常住なるものは無い、皆遷りかはつて行く、「是れ生滅の法」である、生じたるものは滅する、出来たものは壞れる、必ず始あるものは終ありで、生滅の法は果敢ないところのものである。何でも出来たものは壞れて行く、神も佛も實在のものでなければ不滅といふ事は言へないのである、阿彌陀様でも法藏比丘から阿彌陀如來に成つたといへば、これは無常の佛である、途中から出来たといへば必ず壞れるといふことが眞理である。出来たので

はない、本からありし責任ぢやといふことで、初めて不滅といふ事が證明される。出来たと言へば、ハハハ壞れるものぢやナといふことは、佛敎ではモウ根本の原理になつて居る、だから「是れ生滅の法」といふことになる。

そこでこれはどういふ場合にあらはれた事かといふと、彼の雪山童子といふ方が、菩薩行を積んで佛道を求めるが爲に、ヒマラヤ山にわけ登つて善知識を求めに行つたのである、やはり印度ではえらい人が山に住んで居つた、日本でも傳敎大師は比叡山に弘法大師は高野山にといふやうな譯で、えらい人が山の中に居るから、そこでさういふえらい人に會つて道を聽かうといふので、雪山童子がだん／＼道を求めてヒマラヤ山にわけ登つて行つた。さうすると何處とはなしに聞えたのがこの八字の偈である。「諸

行は無常なり、是れ生滅の法」といふ事を、美しい聲で言ふ者がある、雪山童子は佛法を學んで居つたものであるから、「成程これはうまい所を言ひ居るナ」と思つてそれを聞いて居つた、丁度日本で言へば、「色にはへど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ」といふ事を歌のやうにして美しい聲で繰返して言うて居るから、「ハハハこれはなかく／＼良いナ」と思つて聞いて居た譯である。けれどもこれだけでは半分だ、「我が世誰ぞ常ならむ」といふ所では歌の半分である、球に譬へれば如意寶珠の珠が半分に割れて、その半分だけ出たやうなもので、まるい珠ではない、モウ半分これに續いた所の言葉があつて併せて初めて圓珠の如き敎が出来るのだ、どうか後の半偈を聞きたいものだ、誰が斯様なうまい事を言うて居るかと思つて、だん／＼その聲を辿つて岩蔭の所に行

つて見ると、妻の恐ろしい鬼かひどり居つた。それから雪山童子が「諸行は無常なり、是れ生滅の法といふ事を説かれたのはあなたでありますか」と尋ねたところが「さうぢや」と言ふ、そこで「これは半如意珠の如くで、あと半分いゝ事が残つて居るやうに思はれるから、どうか後を説いて貰いたいと思ひます」と言つた、鬼が言ふには、「さうぢや、いゝ所が半分残つて居るけれども、俺は今非常に腹がへつて居るから、食物を得た上でなければ後を説くことが出来ない」と言ふ。それから雪山童子が「それは御尤な事でありませう、それでは食物を差上げませう」と言ふと、鬼が言ふには「俺は死んだものは食はぬ、生物を食ふのぢや、それも生きて居るのをその儘頭から喰ふのぢや、死んだものなどナンボ持つて來ても俺は食はぬ、だから雞でも兎でも狸でも或

は人間でも、何でも宜い、生きて居るものを儘持つて來て呉れ、は頭から喰ひつく、サアそれを持つて來い」といふ事になつた。ところが雪山童子は佛道を修行して不殺生戒を持つて居る、殊に慈悲の心に居る者が自分が教を聞く爲に兎を獲つて來て鬼に喰はすことも出來ず、況んや人の子を取つて來て喰はすことは出來ない、これはどうしても自分みづからの身を犠牲として教を聞かなければならぬ、さうは決心をしたけれども、先に自分が喰はれてしまへば、鬼が説いて呉れる事の聞き手が無くなる。それを聽いてたゞ自分の爲にするのではない、その善き意味合を後の世に傳へよう、廣く言へば日本の「いろは」歌にまでなつて大勢の人に感化を與へたいといふ事が雪山童子の願である故に、自分の命は惜くはないけれども、先に喰はれてしまつては後の話

を聽き取つてそれを或は石に、或は道に書き留める者が無い。だからどうか餓じからうけれども少し辛抱をして先に説いて貰ひたい、説き終つたらこの自分の身を直ちにあなたに差上げるから……と言つたけれども、鬼はなか／＼承知しない、「そんな狡い話はない、聽いてしまつてから左様ならと言つてお前が逃げ出さうものならば、俺も随分足は速いつもりだけれども、併しお前の方が俺より速かつたならば逃げられてしまふ、お前と駆つくらをした事がなければからどつちが速いかわからない、最も安全な方法は先にお前を喰つてさへ置けば間違ひない、先に説いて後から喰ふナンといふ事は危ない方法である、それはいかぬ」と言ふ、そこで雪山童子が「イヤその御心配は御無用である、喰ひつはりを言はないのは佛の教を奉ずる者の常である、殊に私は佛様を信

じて居ること故に、此處に佛の來臨影響を願つて、佛様を證人にして、あなたのお話を聽いたら必ず一身を捧げるといふことを佛の前に誓を立てたら如何のものでせうか」と言つた。さうすると鬼は「それならば宜しい、佛道修行をする者が佛様を證人にした以上は、この位確かな事は無い、それならば餓じなければども暫く我慢をして先に説いてやらう」といふ事になつた。そこに非常な大事な意味合があるのである、人間は宗教の信仰ほど偽りの無いものはない、已れの信するところの神、佛の前に誓つた事はど確かなものはない。私は或る人がつまらない誓を自分の信じて居る佛の前に立て、直ぐそれが變るだらうと思はれる事を誓つて居る人間を見て吃驚した事があるけれども、そんな者はよほど人格のない奴である。直ぐ嘘になる事を佛の前に誓ふ、例へば

酒なら酒はどうしても廢められない人間が、佛様の前に誓を立て、「私はこれから酒を生涯やめます、さつとやめます」と言つて居る、それも人間に向つて言ふなら未だしもであるけれども、御本尊の前で「やめます〜」と言ふ、「お前そんな事を言つて飲みたくなつたらどうする」「エーその時は御免を蒙ります」……そんな誓では何にもならぬ、宗教の誓といふものは決して變るべきものではない、天十様の前に誓を立てたよりも尙ほ確實なるものが、宗教の本尊の前の誓ちや。それは鬼も知つて居るから、「それならば間違いない、よろしい」といふ事になつて、それから鬼が後の半偈を説くのである。それが「いろは」歌の後段の「有爲の奥山今日越えて」の意味台を説くのであつて、即ち

生滅滅己 寂滅爲樂

行くのを「寂滅」と言ふのである。お釋迦様で言へば正覺をお開きになつて華嚴經をお説きになつたのを、寂滅道場に於て華嚴經を説くと言ふのである、即ち煩惱の静まつた所を言ふ。譬に寄せれば月に雲がかゝつて居つたのが、それが吹き拂はれてしまつた有機である、ガヤ〜酔ばらひ見たいな者が大勢やつて来て騒がしくて仕方なかつた奴が皆引上げてしまつて、あとは静になつて、月も爽かに照らし、落つていてナイダーでも注いで一バイ飲むといふ所が寂滅である。死んで行つたりするやうな滅入るやうな意味ではない、誠に心が静まつて立派な考になる所を寂滅と言ふのである。儒教で言へば「明德を明かにする」といふ所が即ち寂滅である、寂滅がいかに言つたならば、大學の道は明德を明かにするに在り……それはいかぬ」と言ふのも同じ事である。そ

斯ういふ八字の偈を説いた「生滅滅己」つて寂滅を樂と爲す——その遷りかはつて行く、小さい我、又變化して常なき人生を見通して、その奥に不滅の我、實在の世界といふものを認識して來た時に、そこに本當の樂みがあるのである。眞の幸福がそこに在るのである。この「寂滅」といふのは大事な事で、儒教などをやる人はこれを誤解して「寂滅の教」といふのは非常に悪い事に考へて居る。「寂」といふ字は「さびしい」といふ字ちや、「滅」は「ほろびる」といふ字ちやといふのでさびしく一人死んで行くやうな事に思つて居るけれども、さういふものではない。「寂滅」といふ事は、この人生の酔ばらつて居る煩惱の生活が静になつて、さうしてつまらない考が消え去つて、正しき理想を持ち、志を立て、信仰に活きて、この上もない立派な精神の活動を開いて

れを朱子といふ儒教の學者が知らなかつたものであるから、いろ〜佛教の悪口などを言つた、その跡をついで大勢の日本の徳川三百年間の儒教を學ぶ者がその尻馬に乗つて、佛教は寂滅の教ちや、厭世悲觀、世を毒するものちやといふやうな事を言つた、よくも馬鹿が捕つたものちや。そんな事では「いろは」歌一つがわからんぢやないか、「淺き夢みし酔ひもせず」がわからぬ、寂滅を罵れば夢みて酔ばらつた方が宜いといふ事になるぢやないか。それ程日本人は佛教に於て無知識であつた、さうして何時までも無知識なる者が大きな面をして居る、今でも「有爲の奥山今日越えて」といふ事もわからぬ者が多いだらう。どうしてもこれはまだ〜人間の文化が大改造をされなければならぬ事である、たゞ今の新しき弊害ばかりではない、舊き弊害に於ても大いに

これを改良して、人生をモウ一つ見通して、滅びて行く小さい我を超越して滅びない我を握り、遷りかはる人生を超越して不滅實在の世界を握つた、その喜悅を現在に持ち來らなければいけない、そこが即ち寂滅である。日蓮聖人の立正安國論で言へば、

三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。

といふあの不滅の世界を持つて來て、現實の世界にその影を宿して來れば、そこに國家の安泰といふもの、根柢が立つ譯である。又聖愚問答鈔に、

遷滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日のうつゝなるべし。

と言はれた通り、遷りかはり、死んで行くと思つたまことに臆病であつたその小さい我の夢は破れて、信仰生活に入つたその日から、モウ我は滅びざる實

在の生活に今日より這入つて居るナといふ事を理解

して、菩提の覺悟でも死んだ時に得るのにあらずして、今日の生活のそこに即ち菩提の覺悟は今日の現實であるといふ所に、日蓮主義の教化はあるのである。「菩提の覺悟は今日のうつゝなるべし」といふ、うつゝといふのは「現」の字を書く、うつゝと言ふと普通には夢うつゝなど言つて夢と同じやうに考へて居るけれども、さうではない、現實といふ事ぢや、今日の現實の我は即ち滅びない寂滅の世界に這入つて居るものである。ところが信心が衰へるとやはり滅びるところの「色にはへど散りぬるを」といふ方の我が出て來る、その色香に迷うて滅び行く我になつた時には臆病になつて來る「あゝ俺もだん／＼年を取つて死ぬのかナ」……ビク／＼して來る。そこに信心が起つて來ると、「あゝつまらない、今ま

でビク／＼して居つたが、さういふ事は信仰が衰へた結果である、我は既に不滅の生活に這入つて居るのだ」といふことになつて、精神に安定があるからそこに悦びがあり、力がある。これは成田様にお参りするとか、帝釋様にお参りするやうな精神状態では、この本當の安心立命、本當の力といふものは得られないものである。正しい信念に入つて、現實の我、それが不滅の佛に通つて居るといふ事を信じて、初めてそこに成佛のよろこびがある。日蓮聖人が、「成佛のことはりを時々刻々に之を味ふ」と言はれたのもそれである、或は頭の座に坐られた時でも、臭き頭を法華經に捧げて金色の如來と成るは沙を以て金に易ゆるが如し、これほどのよろこびを笑へかし。

と言はれた、その金色の如來となるといふ實在の生

活が、現在頸きられる時のよろこびの力になつて居る。死んでからのよろこびではない。その頭の座に坐つて居る時のよろこびの力は、金色の如來となつて不滅の生活に續いて行くといふ事があるからである。即ち先刻申した通り鑄物の型は打ち壞されてもよろしい、その外面の砂や土で拵へてある型を壞せば、内から金の光の佛が出て來るのである、モウ少し壞さずに働きたいと思つたけれども、仕方がない、どうしても壞すといふ事ならば壞して下さい、臭き頭を法華經に捧げて金色の如來となるのは、砂を黄金に代へるやうなものだ、これ程のよろこびを笑へかしといふ事が初めてそこでわかつて來るだらう。ところが今のドンドコ法華の連中はそれがわからな

有難いんだ……斬れたらどうする……頭が斬れるやうなら信心やめてしまふ……それでは駄目ぢや。斬れたつて宜いぢやないか、人間の頭だもの、斬れるのが當り前ぢや。それが斬れたら信心やめてしまふといふならば、終ひに池上で歿なられた時にも日蓮宗を捨て、しまはなければならぬ。刀でも頭の斬れない位の人、病氣で死ぬナンといふ事はまことに馬鹿氣な話ぢやないか、死んで居たら宜ささうなものである。それを龍の口で頸が斬れたら信心やめてしまふ、池上では病氣で死んでも構はん……そんな予盾したやうな事を昔有難く思はして居つたといふのは、智慧の廻り兼ねた人間が、理想も思想もわからずにやつたものである、左様な譯のわからぬ事、有難いといふやうなそんな信者ならやめた方が宜い。その現實のよろこびの生活が不滅の生滅に續

いてあらはれて居る所に尊さがある。それが「寂滅を樂と爲す」といふ事である。これが現在のよろこびであつて、さうして死後のよろこびに續いて居るものであるから、そこで華嚴經の最初説法も寂滅道場に於てと言ひ、最後の涅槃も寂滅涅槃と言ふ、佛に成つたことも寂滅であるし、人生の終に達したことも寂滅といふ言葉であらはされる、そこでこの「寂滅」といふ言葉が、まことに分りにくい事になつて来るのである。死んだ場合も寂滅とは書いてあるけれども、それは人生の濁りが除れて佛に成つたといふことである。それがわからぬ者から見れば、死んだ時はかり言ふやうに思はれるものだから、「彼奴もさう／＼寂滅しやがつた」……そんな言葉にばかり使はれるやうになつたのである。

そこで雪山童子はこの半偈を聞いて非常によろこ

んだ「誠に有難いことであります。これ程結構な教を聞き得てお禮の申し様もない、いまま少しどうか猶豫を願ひたい」といふので、それからその偈を石壁松路に書きつけることになつた、石の平らな所や、それから山の路——松路といふのは松並木の路である、さういふ人のめつたに通らぬやうな所だけども、それでも路に大きな字で深くそれを書きつけて、さうして自分が死んでも後にこの教が遺るやうにも努めた。この偈は僅か十六文字であるけれども、これは佛教の精神がこの中に含まれて居る、自分は今日菩薩行を積んで大乘佛教の眞髓を斯の如き簡單な言葉で教へられた事を感謝すると言つてよろこんだ。それからいよ／＼約束の通り鬼に自分の身を捧げようといふので、衣の袖はこれをちやんと腕に捲きつけ、裾は衣を裂いて足に括りつけて、さうして傍の

高い樹の上から鬼の口の中に飛び込むべく、だん／＼樹の上に登つて行つた。さうするとそこへ樹の神様が出て来て、雪山童子に囁いて言ふには、「お前はよつほど馬鹿者ぢやナ、あんな僅に生滅滅已寂滅爲樂といふ八字ぢやないか、前の八字は只で聞いたんだから、後の八字だ、たつた八字の爲にその尊い二つと無い人間の身を鬼に喰はすナンといふ事はあまりに犠牲が高過ぎるぢやないか、あんな事ぐらゐ聞いたつて、それは雞の一びきも捕まへて来て喰はすか、鬼の一びきも探して来て喰はせて置けば宜いぢやないか、それを自分の身をそれが爲に犠牲にするなどといふことは、イヤお前はよつほど馬鹿者だ、考へなほしなさい、鬼は必ずしも汝を喰はうといふのではない、今からでも、ちよつと待つて呉れ、そこらに居る鬼でも雞でも捕まへて来るからと言つ

て、それを捕まへて来て鬼の口に抛り込んでやれば、必ずしも汝の命を犠牲にしないでも、お前は助かるぢやないか、それを正直に直ぐに鬼が言ふからといつて自から鬼の口に飛び込むなどといふのは、それは少し馬鹿ぢやないか」と言つて樹の幹様が嘲つた。その時に雪山童子が「それは考が違ふだらう、私から見るとお前の方がよほど愚に思ふ」と言つて、そこでこの教の尊いことを話をして聴かせた。人間の壽命は尊いには違ひないけれども、いつ何時これが消え去るかかわからぬ、諸行無常の風は時を選ばない、その無常の風に人間の壽命を吹き去られてしまへば、只で壽命を取られてしまふ譯である、今自分は樹の上に登つてお前と話をして居るけれども、うつかりして話に氣を取られて枝をつかまへて居る手が弛んだら、バタリと下へ落ちる、落ちれば只で俺

は死んでしまふのぢや。この人間の壽命が何時までも續いて行くものだといふ確實な保證が與へられ、よほど人間といふものも尊いものになるけれども、今夜死ぬかも知れん、明日死ぬかも知れんといふことになる、人間といふものは案外價値の無いものだ。茲に大きな鎗が一尾ある、これを一尾買つて置いて下さい、一週間ぐらゐは大丈夫騙りはしませんといふ保證が附けば、成程一尾三十圓で買つて置いても宜いけれども、今晚までにはモウ腐るかも知れない、鹽でも振つて置かなければ明日までは持たないだらうといふやうな事であるならば、大きな鎗一尾を高い錢を出して買つて置く奴は無い。人間の生命といふものも、必ず永續するといふ保證が附いて居らぬ限りは、人間が尊いといふ事は言へない譯ぢやないか、恰も瓦を以て石の上に落すやうな

もので——茲には瓦と言つてあるけれども、それは丁度硝子の器のやうな意味になつて居る、硝子で出来たすべり易いやうな器は「これは大變い、コップだナ」と言つても、ツルリと滑つて石の上にはボンと落せば、ガチャリーン……それつ切りぢや。然るに教の方は、僅に八文字の偈といへば例でもないやうだけれども、「生滅滅し己つて寂滅を樂と爲す」といふ、人生の遷りかはる世の中に滅びない信仰を打ち立てなければ駄目だぞといふこの教は、すべての教の根本精神である、之を除つては宗教なく、佛教なく、大乘の教は無い。生滅滅己寂滅爲樂といふこの教は恰も珠のやうな尊いものである。人間の命は瓦のやうなものである。直ぐに壊れる瓦と永遠に壊れない珠との取返つこをするのに、何故にこれを愚かといふ事が言へるか、といふことを雪山童子が熱心

に語つて居る。さうして之を語り終ると、樹の上から鬼の口を開けて待つて居るところを見定めて、まことに殊勝らしく、衣の襟を正し、心を整へて、一心合掌して佛様に信仰の告白をし了つて、心靜かに鬼の口を見て、淨い立派な信仰を以てその鬼の口に飛び込んだ。バツと鬼の口に飛び込んだと思ふと、鬼が今まで口を開けて怖い顔をして居つた奴が、遽に天の神様——帝釋天王に變つて、さうして柔らかな衣の袖を以て雪山童子の飛んだ身を受け止めて、善哉々々雪山童子、あなたの菩薩行を志したる精神はまことに立派である、必ずあなたは菩提を成就して佛様に成ることは間違ひない立派な方である、私は今は帝釋天王と言つてもまだ六道の迷の中に居るものである、今は神様と人から言はれて居るけれども、天には還つて三途に墮つといふ事がある、天の

果報盡きれば又下へ墮ちなければならぬ、丁度尺
 綾が物干竿の上へ登つて行つたやうなもので、登
 り切つてモウ登る所が無くなれば又下を向いて降り
 て来るやうなものである、自分は最早や登り詰めて、
 これよりはモウ下へ降りなければならぬ、淺ましき
 天の生活である、必ずや流轉の迷を辿るものである
 が、どうか今日の事を縁として、あなたが佛様にな
 つたならばどうぞ私を見捨てずに救つて貰ひたいと
 言つて、帝釋天王が雪山童子に熱心に頼んで居る。
 雪山童子はその事は承知をしたと快くそれを肯いて、
 さうしてその話は終つて居るのである。これが雪山
 童子半偈の爲に鬼に身を投ずるといつて、日蓮聖人
 の御聖訓に到る處にあらはれて居る事である。この
 話はお伽噺が混つたやうな事であるけれども、その
 内容を縫うて居る思想といふものは最も健全なもの

である、鬼になつたり、樹の上から飛んだりといふ
 ことは、人間の思想を惹きつける爲にさういふ説話
 として出て来たものであるけれども、併し凡そ法を
 求むるの志、又そこに説かれた法といふものに於
 ては、何もそこに間違ひは無い、眞實を説いてある
 のである、死と珠との話も皆それは眞實である。そ
 れで日蓮聖人が龍の口の頭の座に坐つて、「臭き頭を
 法華經に捧げて金色の如來となるは沙を以て黄金に
 かふるが如し」と言はれたのは、これは今の雪山童
 子が樹の神様に言うて居る言葉からして轉化して來
 たものだと私は思ふ。日蓮聖人はその時にやはり雪
 山童子の事を想ひ起されたのである、今日こそは日
 蓮法華經の爲に命を捧げるのだが、思へば涅槃經を
 讀んだ時、雪山童子は僅に半偈八文字の爲に快く命
 を捨て、樹の神様がこれを嘲つた時に、却つてお

前の方が愚であらう、死と珠と取換つて居るのを
 ナンで嘲ることがあるかと言つて居るが、彼は僅に
 八文字である、今日蓮は法華經八卷六萬九千三百八
 十四文字の、この一々文字はれ眞佛と言はれた法華
 經の爲に命を捨てるのであるが、この臭き頭を法華
 經に捧げるのは、沙と黄金の取換つてであると言は
 れた。即ち死と珠といふのが、沙と黄金といふ事に
 變つて居るだけで、同じ事である。雪山童子のこの
 法を思ふ熱烈なる精神が、日蓮聖人龍の口の法座の
 時に胸に響いた、それが「沙を以て黄金にかふるが
 如し」といふ聖訓となつて現れたと私は思ふのであ
 る。さうしてそこに於てこの有爲の奥山が越えられ
 て居る、沙を以て黄金にかへるごか、死を以て玉に
 易へるといふ意味がわかつた時、有爲の奥山が越え
 られて居るのである、それが信仰の眞實もわからず、

佛の有難さもわからず、滅びない死なない自分とい
 ふ者を見出し得ないで、何處までも滅びて行くこの
 有爲轉變の人生ばかりが有難いといふ事になつて、
 「法華は現世利益ぢや、狐が落ちる、狸が落ちる、
 貧乏人は金持になる」……といふやうな事を言つて、
 結局滅び行く我に於て信仰の根據を有つて居る者は、
 雪山童子の話もわからず、日蓮聖人の龍の口の「臭
 き頭を法華經に捧げて金色の如來となる」といふ事
 もわからぬ、又「いろは」歌の「有爲の奥山今日越え
 て」もわからぬといふ事になつて、何もかもわから
 ぬ者になつてしまふ。
 (未完)

我等いかに進むべきか

森川日修

身を裝飾し、美衣を纏ひ、旃檀木を以て彩りたる舞女は、大道の繁華の中に、五樂に合して舞ひき。
我乞食のために入城し、住きて此の婦の身を裝飾し、美衣を着け、宛死屍に繋れるが如くなるを見ぬ。
それより、我に正思惟起り、思惟現れ、厭離の情生じぬ。其より我が心は解脱しぬ、法の善き實を見よ、我三明に通達し、佛の教を成ぜり。
(ナーササマラ長老)

人の制し難きは愛慾である。男性の女性を求め、女性の男性を慕ふ、之れありてそこに人類があり、衆生がある。若し悉く厭離の情起らば自然人類は絶滅し、人なく家庭なく社會なく國家もなく、たゞ小乘の涅槃あるのみである。此の涅槃海が眞に顯現し得べきものであらうか、或に一人或は一部分の者は證得し得べしとするも、大法の上より考察せば此れ

は人類苦惱の逃避的觀察でないであらうか、又釋尊の大涅槃は是れであらうか。
釋尊未だ正覺を成じ給はざるに、深夜森林に獨座獨行に寂しさを感せられたこともあつた。時に他の修行者も夜の恐怖を脱し難かつた。彼れは此の恐怖を脱却せんとて晝を夜と思ひ夜を晝と惟ふべく努めた。しかし夫は無効であつて反て恐怖の度をました。釋尊之を聞き給ひて晝を夜と思ひ夜を晝と惟はんとするは抑も誤りである。晝は晝、夜は夜と思ひ寂莫恐怖を感せざるこそ眞の修進なりとおはせられた。是れ語は簡單なりとするも、其處に釋尊の大真理が含まれてをるやうに思ふ。晝を晝と思ひ夜を夜と惟ふとは何ぞ。現象界に於ても理想界に於ても、

如實に智見することである。如實に智見すればとて現象界の邪惡醜を其儘に受容するのではなく、邪惡醜と眞善美のつながりを如實に見るのであつて、其のつながりを如實に體驗せんこの努力即ち修行が宗教の舞臺であつて、邪惡醜が眞善美に顯現するそれが如來の教法である。

小乗教の肉を否定し、心を否定し、我等の肉は邪惡醜のもの、愛着の心も總て邪惡醜のものなれば、之を悉く厭棄し、空の涅槃に到らんと努力するもの、一觀察に相違なく、猥りに現象界に跳躍する迷妄を破するに足るが、現象界を離れて別の理想界に滅没せんとするは未だ完全の法を體達したものでない。

諸の世間を了知するに、諒の如く、光燈の如く、譬の如く、亦夢の如く、幻の如く、變化の如し。
(華嚴經)
一切の法に於て心を前導と爲す、若し能く心を知れば、悉く衆法を知る、種種の世法は皆心に由りて造らるればなり。
(般若經)

權大乘教の説くところ種々の説明し方があつてやう

なれど、結局唯心的の觀察が基本をなしをるやうに思ふ。法を唯心的に觀察することも如實智見の一方法とすることもできるが、眞の意義ある人生社會を此の意味に於て考察せば、人生は總て無意義のことになる。然るに佛敎を見るもの多くこゝに止まり、敢てあやしまない、支那に於ても日本に於ても又現在の佛敎學者は佛敎をこゝに止むるから、餘り佛敎は活ける人生に要なきもの、先づ人の熱氣を去る方便として、冷方をかける位に見てをる。語をかへて言へば佛敎は人生に於て社會に於て消極的のものであつて積極的の者でないと思ふが佛敎に對する一の習性になつてをる。

異端の虛無寂滅の敎へ、其の高きこと大學に過ぎて實無し。
(朱子)

朱熹が大學の序に云つてをるが、是が尤も適評である。佛敎は空寂斷滅して本覺とし、老子は只虛無にしてあとかたなく、名づけかたごられざる者を以

て道徳とする、又た心術は、寂然として動かさず感じて遂に天下の故に通ずるなれば、心静かなる時、寂として一念をこらざれども、わづかに感ずることあれば即ちこれに應じて、天下の萬理、もれずたがはず、是れ寂にして感なりとの見解の如きは高遠のやうに見へるが、規矩法度の外に出でたもので、人倫を正ふし、世道を治むるには到底大學にかなわぬと云ふてをる。然り佛教が單に觀念法に止まらば朱子の言は尤もである。支那の教祖等が佛教の説明を種々してをるも結局朱子の評を出でない。本邦に於ても榮西、道玄、白隱、法然、親鸞、弘法、の學流皆是れを出でない。勿論禪と淨土と眞言の觀察點修行點は一見非常の差別あるやうに見えるが、結局同一點の説明式になつてくる。今是を圖示して見やう。



此の眞實相顯現してこそ眞の如來あり、眞の淨土があり、我等の進むべき原理に到達したのである。此れは釋尊の顯現としては法華經であり、釋尊以後の顯現者としては聖日蓮あるのみである。佛教は法を認識し説明するが目的でない、之を生きた人生に體験するが佛教である。即ち我等生きた法身、少なくとも法身たらんと努力するところに、佛教の眞價值がある。

それ法を見るものは、我を見る、我を見るものは法を見る、何となれば法を見るが故に我を見、我を見るが故に法を見ればなり。(毘耶耶)

法と人と分離した考察は、未だ不完全を免かれぬ。法は人なり、人は法なり、是れを顯現せねばならぬ。是を完全に言顯はした經典は、一切經廣しと雖も唯法華經である。

今此の三界は皆是我有なり、其中の衆生は、皆悉く是れ吾子なり。(法華經)

法と人と分離せば此の意義を解しかねる、釋尊の

禪は法を直感せんとし、淨土は法を救ひに見、弘法は法を理に見たものであつて、結局人生の活動、社會の發展等は眼中におかねが根本義である。彼等云はん人類の向上社會の發展を度外視するものでない、第一義の上には右の如くなるも、第二義に於ては人生を重視すると云ふだらう。是れが抑も不徹底の極である、第二義にも第二義にも直接人生に意義なものは空理空論であつて、朱子の適許に低頭しなければならぬ。

釋尊は始めより終り迄、肉を否定して現象界を棄て給ひしか、又た唯心的に法を觀察し給ひしまゝなるか、釋尊は時に肉を否定し、或は唯心的に法を説明せられてをる。否な是等の説明が經典の量の上には大部分を占めてをらう。されど釋尊は是等の經典に眞意義は説示されて居らぬ、釋尊は物心兩界を一如し、現象界と理想界を一如し、法と人を一如し給ふところが釋尊の眞意であり、法界の眞實相である。

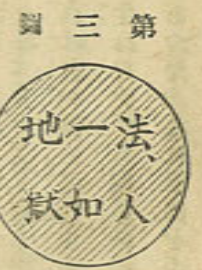
靈いかに偉大なりとも、宇宙人類等を悉く抱擁する譯に行かね法的全顯現が釋尊であり、我等も法の内にあるから釋尊に抱擁さるゝのである。彼れは法の全體を顯現し、此は法の一分又は龜法に流轉する相違はあるも、全顯現の如來に抱擁さるゝから、皆是我有と稱せらるゝ所以であらう。父子の關係にしても基督教の能造所造の關係でなく、我等は法の流れに如來の懷に抱擁さるゝから、温き父子の關係が成立するのである。故に聖日蓮が釋尊の外彌陀でも大日でも父子の義が成立せぬと常に主張されたのである。

今佛に從ひ上りて未だ聞かざる所の未曾有の法を聞きて諸の憂悔を斷し、身意泰然として、快く安穩を得たり、今日乃ち知んぬ眞に是れ佛子なり、佛口より生じ、法化より生じて佛法の分を得たり。(法華經)

此れは舍利弗の遺懷である。彼は初めは梵天の口より生れた、即ち創造神の口より生れたと信じたこともあつた。彼れは肉を否定する涅槃も聞いた、彼

は彌陀の願力も聞いた、が、しかし法華經に至る迄佛口より生じ法より生じた事は知らなんだ。彼は婆羅門階級の一人でなかつた。彼は大法の顯現者たる如來の流れに入れる偉大なる佛子であつた。彼は神の意志に支配さるゝ者でなく、彼自ら法の支持者であるとの自覺に達した。

故に彼れは法華經に至り法人一如の大真理を獲得した、涅槃は遠くに求むるに及ばぬ、肉を離れても不可であり、理想界を死後に求むるに及ばぬ、彼は既に如來の分を得た。彼は眞の歡喜踊躍を感じた。今此を圖示して見よ。



第一圖は眞善美の法と悉達の一如にして、茲に久遠の本佛があり、妙法蓮華の全顯を示し、第二圖は妙法の一部を顯現したる人、第三圖は邪惡醜の法と人と一致したる状態にして社會は闇黒であり、國家は滅亡し、人類は地獄の苦を受くるを示し、第四圖は邪惡醜の法に人類が漸次傾きつゝある状態を示したものである。第二圖の人類は第一圖に進む可能性があり、第四圖は第三圖に進む可能性が有る。第一圖より見れば眞善美の法は正法に背反するものなれば、茲に誘法と云はるゝのである。誘法とは正法に繋がりのない行動、即ち衝動的に本能的に行動するの意に

して、人の行爲が當體蓮華を顯現すべく努力せず、反對に滅亡墮落に傾く傾向は皆誘法である。正法とは現象界に於て肉に於て其の歩道が理想界を常に離れず、即ち一步一步當體蓮華を顯現すべく進むとき、此れ即ち正法と稱すべく、我等の進むべき道であらうと思ふ、今茲に現象界に於て肉に於て云ふた、是れは現象界を總て否定し肉を否定するとせば、それは人類の佛教でない、天は空寂な佛教である、曩に理想界を常恒不變と見るは一應なりと述べた、元來多くの佛教者は理想界を常恒不變と見るところに誤謬が生ずるやうに思ふ。彌陀の信仰大日の論證等又は唯心觀等は現象界を離れて別に寂然たる理想界に入せんとする考察である、然るに現象界のみ活動し理想界は静止するものでない。現象界の活動と同時に理想界も活動しつゝあるものである、決して彌陀等が寂靜の安養界に現象界の人類を待つてをるものでない、その考察が全然誤謬であるから、聖日蓮

は此等の思想系を悉く誘法と批判されたものである。なせなれば如來の理想界を現象界の如く活動なきものとする、如來の無始無終常恒不斷の教化がないことなる、如來の慈悲は間斷なく行はるゝ者とは、此れ即ち理想界も間斷なき活動あること現象界と同一と見なければならぬ。しかれば邪惡醜の活動と眞善美の活動は永久に活動するが實相である、故に我等は邪惡醜の活動を滅し、眞善美の活動を擴大せしむるこそ、即ち正法の護持者と云はるゝのである。よし彌陀の慈悲は間斷なく行はるゝと説くとも、夫れは抽象的に描寫せし者にして、肉の悉達と法と一如したる如來の如き具體的活動でない、具體的活動でなきが故に、生ける人生の眞活動に何等資するところがないことになる。

本地久成の圖説、此の三界にいませり。此土を捨て何れの土を願ふべき、故に法華經修行の者は所住の處を淨土と思ふべし、何ぞ煩はしく他處を求めん。(日 蓮)

現象界と理想界を一如し、法と人は一如である。現象界の肉を捨て、空の涅槃を求むるに及ばぬ。又現象界を邪惡なりとして、山林に觀念をこらすも道でない、我等は如來の流に入り、邪惡醜の現象界の龜法を眞善美の妙法たらしむべく自ら體驗し、當體蓮華たるべく努力しなければならん。國家社會が邪惡醜の人に汚たされてをるとせば、眞善美の淨土を建設すべく努力せねばならん。若し法華經を此土に顯現せんと精進せざる者は謗法の人である。自ら妙法蓮華を體現し、人類相互に妙法蓮華たらしめんと勇猛精進すること今生の思出である。

天下萬民諸乘一佛乘となりて、妙法蓮華經昌せんとす。萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨壤を碎かず、代は教養の言となりて、今生に不詳の災難を拂ひ、長生の術を得ん。人法共に不老不死之理、顯れん時を各々御覽せよ、現世安穩の證文証ひあるべからず。(日蓮)

人法共に不老不死の理を全顯現したまへる如來道

法華經要文講義

本多日生

一二四、諸の善根を生ぜしめんご欲して、若干の因縁、譬諭、言辭を以て、種々に法を説く、所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず。

さうしてそのやうな智慧があつて教を説き、慈悲があつて教を説いたが、併しその教を説く所以の目的が何處にあつたかといへば、その濟度といふ事は唯だ迷信的に行うのではない、所謂倫理的なる目的に依つて衆生濟度をしやうとしたのである。それは釋迦の教からいへば、教はれるのは功德善根の力であり、迷ふのは罪惡、業の力であるといふ事が原則

を眞に體驗せんとせば、聖日蓮の如き大勇猛心大精進なくてはならぬ。(中略)

(帝都復興の聲、未曾有の大運事件、國會解散、民衆運動の聲を聞きつゝ、此稿了る)

四月十一日より十三日に至る三日間

音樂大法會

- 一、國體會法要
 - 一、祠堂施主祖先靈法要
 - 一、財國翼賛員祖先靈法要
- 每日
午前九時—法要管長本多祝下
午後七時—說教數十名
十一、十二日兩日午後七時講演
- 右の通り修行されますから御參詣下さい。
- 準備の都合がありますから、御參詣の人員を四月五日迄に事務所へ豫報して下さい。

京都市寺町二條
總本山妙滿寺
電上 八六番
振替大阪四六二五九番

になつて居るから、そこで教を説く全體の目的は、諸の善根を生せしめやうと思つてするので、それが爲に教は起つて居る。その教を判りよくしなければならぬから、そこで「若干の因縁」「因縁」といふのは實例といふやうなもので「何處にお婆さんがあつてどういふ事をした、性が悪かつたから餓鬼になつた」とか或は「改心して善い事をしたから斯うなつた」とかいふやうな、實例を擧げて人々に説けば、非常に感激するものである。それは拵へ事でも宜いのである、心學道話ナンといふものは必ずさういふものである、「どこかの國のお婆さんがあつて……」といふ事では人の觀念が薄いから「武藏の

國の江戸の町に一人のお婆さんがあつた」といふ様に言ふ、これだけの事が附いて居ると、それは實在の人となつて感激が非常に強いのである。「假にお婆さんがあつたとして」と言つたんでは感じが薄いけれども、「東京の浅草に一人のお婆さんがあつて、年は六十五であつた」といふ様に言うとは、非常に人心に感激の度が違ふ、それを「若干の因縁」といふのである、總ての心學道話や教訓の材料の書物を御覽になつても判る、實際にあつたとしても、それだけで事の足らぬものは色々の事を附加へて、教化の材料に使つて居る、東郷さんなら東郷さんの事を説くにしても、東郷さんに就て材料が少なかつたならば、その東郷さんといふ一つの事柄に或る事柄を附加へて、色々に話して宜いのである。さういふ風にして理想化される、乃木さんなら乃木さんが部下に對し

てはどうであつた、奥さんに對してはどうであつた、團子を食べた時にどうであつたといふ様な話でも、團子を食べないでも構はないのだが、「乃木さんの團子を食べる時は」といふ様に話すと、非常に人心感化上の利益がある、教化を目的とするものはそれで宜いのである、又事實といつて見た所が、左様な教化の上からいふ時には、事實に在つた事が何も尊い譯ではない、實際に在つた事であれば値打が無いといふ譯ではない、例へば摺鉢を落した、事實は破れなかつたけれども「摺鉢は落したら破れた」といふ方が宜いと思ふ、破れたといつて一向差支ない、落しても破れなかつたといふ爲に感動がないといふ事になるならば、「破れた」といつた方が宜いのである。そんな事は世間の學者は頭が出来て居らぬから、詰らぬ事に引かゝつて居るのである。文藝なら文藝の

方から考へたならば、左様な愚な事は無くなつてしまふと思ふ。彫刻なら彫刻をしやうと思ふのに、その人を美しくしやうと考へた時には、どうしてもやはりそれだけの理想を加へてやつて行くのである。繪畫でも彫刻でも小説でも劇でも皆さうである。だから釋迦が衆生教化の爲に因縁を應用し、譬論を應用し、さうして種々の言辭を以て法を説いた、その言辭といふ中には流暢な言葉で説く時もあるし、莊嚴な言葉で説く時もあるし、種々なる言葉の作用がある、即ち演説や説教といふものはどうでも唯だ説きさへすれば宜いと言つて、眠たいやうな聲で下を向いて「真理と云へば真理、お父さんと言へばやはりお父さんで……」といふやうな事を言つて居つたら駄目であるから感激を與へなければいかぬ、それが言辭といふのである、今日でいへば修辭といふ

やうな意味である。釋迦は非常に説明が上手であつた、音調なども種々に自由に使はれた次第である、左様にして様々の法を説いた。斯の如き衆生教化の事柄を續けて「未だ曾て暫くも廢せず、この人生に出た時、無論間斷なく衆生教化に力を盡された、實に釋迦ぐらの活動的の人はなかつたのであります。それ故に兎にも角にも七千餘卷の經卷として、非常な大部な一切經といふものが遺つて居るのである、その中には後からの混入も無論あらうけれども、又その代りに八年に説教した法華經をタツタ八卷にして居るといふ様な所もあるから、中々澤山釋迦の説明は逸して居る譯である、本當に釋迦一代の説教を速記が何かで寫したとしたならば、何萬卷になるか判らぬ位釋迦は説教が好きであつた、説いて／＼説き盡すといふこの熱誠、そ

これは皆衆生をして諸の善根を生ぜしめやうと欲したのである。此を能く考へなければならぬ、唯だ信心を教へたといふのではない、信心といふ事も善根の一種である、或る説明に依つては一切の善根の本だといふ事もいへるけれども、末といふ事にしても、廣い意味に於て善根功德といへば信心もやはりその一種である、主なるものであるけれども一種である、だから釋迦の目的は諸の善根を生ぜしめんとしてといふ所を餘種強く考へなければならぬ、單に宗教の信仰ではない、道德的の事に重きを置いて一代佛教が起つて居る譯である、併し無論その善根の一番初めは信根と言つて、信心が善の根本である事は宗教として論ずる迄もない、この「未曾暫廢」の句は非常に愉快な句で、その佛の仕事、衆生教化の爲の慈悲活動の仕事が少しも廢し休むといふ事はない、「未

だ曾て暫くも廢せず」といふ事は、實に良い句であります。この四字を正解すれば、本佛は如何に吾々に親しくもあり、親切なものかといふことが能く判る、宗教の絶對人格を説くに、斯ういふ言葉以上には説きやうが無いと思ふのであります。

一二五、是の如く我れ成佛してより已來、甚だ大いに久遠にして、壽命無量阿僧祇劫なり、常住にして滅せず。

自分が斯の如く久遠劫來爲し來つたのは、今日も今度現れて諸子の見て居る通りにやつて居るが、その事を更に過去に及ぼして考へれば、甚だ久遠にして壽命無量阿僧祇劫である。これは過去の久遠の壽命が無量であるといふ事を説いて、今迄現在益物として説いたこの事を、始め無き以前から我はやつて

居る、今もやつて居る、又今後もやるのである。そこでこの「常住にして滅せず」といふ事は未來に及んで居るのである、「甚だ久遠」は過去である、「如是」は現在益物の光景を指すのであるから、そこで壽量は過去、現在、未來の三世に同一の活動を存續して居る事を説いた事になつて居るのである。茲で先づ一段結ばれて居るので、これより以下の所は尙ほ之を補足して行くのであります。

一二六、諸の善男子よ、我れ本菩薩の道を行じて、成ぜし所の壽命、今猶ほ未だ盡さず、復上の數に倍せり。

釋迦が何故にそのやうな長き壽命を得て居るかという、それは功德の力である。併し徳を積んで而して後に佛に成つたとすれば、佛に成らぬ以前が出

て來ることになるから、この文章を解するには餘程大事な點がある。若し徳を積んでと言はずして、本から自然に佛であるといふならば——基督教の神などはさうであるが、又大日如來などもさうであるが——それは佛教の法則には外れるのである、唯だ偶然に自然に物が存して居つたといふことでは、因果の法則に反するから、そこでやはり徳を積んでその壽命があり本佛があると説かれた。けれども「徳を積んで」といふ言葉に引かゝると、始めが出来て來るから、そこでこれは始めを説かんとするものではない、唯だその本佛が自然的なものではなくして、非常な徳を積み、持つて居るといふ事を教へるが爲に出て來る言葉である。我れ本菩薩の道を行じて、

成ぜし所の壽命——その菩薩行の徳に依つて得た壽命でも、今日まで盡きない程な果報を有つて居る、

それが佛に成つて又間斷なく今日まで廣大なる徳を積んで居るのであるからして、それ故に我が壽命は無限である、例を以て言へば、自分が菩薩の時に儲けただけの物でも、それを坐食をして使つてもまだ中々使ひきれないだけの物を持つて居るのに、それが遊ばずに、佛に成つてもヨリ以上に儲けて行き居るといふやうな譯であるから、我が實は盡きないと言つたやうなもので、菩薩行の徳に於てさへもその壽命は廣大無邊なるものである、上の數に倍する程なものである、上の數とは五百塵點の壽命を指して居る、この説き方が又大事なのである。弘法大師はこれが判らなかつたものであるから、それで議論といふやうなことを言つたが、一體佛敎の大事な問題になると、實在といふ事と因果の關係といふ事を併せて見なければならぬ、そこで方便品には諸法

實相といつて、實在を説いて、直ぐに十如の因果をそこに説いた、實在であつて而して因果がある、それを本因本果といふ。若し前後の關係に於て因果を見るならば本因本果とは言はぬ、因果があつて而かも實在である。それはどういふ事がというかと、一切の物がさうナンである、因果を前後に見るのは、極く思想の未熟な場合にいふのである、それは何に就て考へても判るので、種と樹といふものから考へても判る、梅の種は梅の樹に實つた物に違ひない、さうすると樹は本で種は末である、けれども「その樹は」といふと種から生へた物ぢや、さうすると種が本になつて樹が末になる、前後といふものがあるに違ひない、樹に實つた種、その樹もやはり種から生へたのであるとすれば、やはり前後がある、前後があるといふことを押し詰めた時、一番始め種があつ

たのか、樹があつたのかといふことになる、「樹だけあつた」といへば「その樹はどうして出来た」といふ問題が直ぐ起る、「種だけあつた」といへば「その種はどうしてあつた」といふことになるから、そこで種と樹といふものをズツと本に戻して行けば、どちらも有つたといふことになる、それが本因本果といふのである。さうして實際の上には遂用して、因果前後の關係を其處に生じて居るのである、その第一の原因を本因果といふのであります。さういふ説明式は殆ど大乘の定則であつて、佛敎の眞理を見る原則である、それが方便品の所謂諸法實相、如是因、如是果といふ言葉になつて居るのである。或は「因如果如」と使つてある、「因は果の如く、果は因の如し」と言つて、この二つが同じ關係になつて居るのである。だから實在であつて因果の法則に解れない

やうに説明をするのに、やはりこの「徳を積んで」といふ言葉が要るのである、けれどもそれは前後を立てるのではない、本因本果であるから廣大なる徳を有する佛なりとして考へれば宜いのである。日蓮聖人の「本尊鈔」にもさういふ風に説いてある、「我本行菩薩道は佛界所具の九界なり」と解釋してあつて、佛界の上に於ての説明とされて居る、之を菩薩を先にして後に佛があるとして見れば、本佛といふ事は壞れてしまふ、これは非常に警戒すべき文句である、天台宗が眞言宗にやられて、傳教大師が折角先に置いて置いたに拘らず、慈覺や智證が弘法大師にやられたといふのは、この點からやられたのである。釋迦は偉いけれども始めがある、大日如來は始めなどは無い、絶對だ」といふ事に依つて、毘盧遮那如來といふものに降伏したのであります、

日蓮聖人はその缺陷を見て、寧ろ毘盧遮那のやうに因果の關係から離れて居るものはいけない、さういふ自然の偶然の佛では駄目だといふ所からして、この一大事を愈々公場對決といふ事になれば言はうと思つて考へて居つた、遂にさういふ機會がなかつたものであるから、その觀念を「開目鈔」とかその他の遺書に漏したのであるが、その漏した秘訣を味つてこのお經文を解釋しなければならぬ譯である。

それは餘程大きな問題であつて、精密な研究を積まねど、一切の宗教はそこで鼻をついて居るのであるから、基督教の神でもやはり獨斷的になつて「神と思ひしものが神ぢや」といふやうな事になる。又淨土の阿彌陀などは始めがあるといふ事の爲に消えてしまふのであるから、餘程大事な問題である。

一二七、然るに今實の滅度に非ざれど

も、而も便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ。

この所は、左様な常住不滅の如來であるが、必要に依つて入滅を示すものである、だから實際滅度して亡くなるのではないけれども、方便を以て滅度を示すのである、それは衆生教化の方法である、その何故かといふことを次の「二二八」「二二九」に於て詳しく説いたものである。これは大切な事であつて、その入滅は好い加減の言ひ譯をするを誤解されてはいかぬから、詳細に述べられたのである。(つゞく)

思つた事のまゝを

常樂庵主人

山荘の庭は静寂である。森閑そのもの、知く、それでゐてたまらない風景を源はせてゐる。

夕ぐれ、四邊がネーと薄闇になつた頃、遠い町の灯が寝木の梢々にチカチカと瞬いてゐる。

オサオサ！と大きな音が静寂を破つて、黒い影が頭上をかすめて、本堂から隣りの敷へ飛んだ。驚いて見るそそれは鷺の鳥……鼻であつた。

静寂は又續く。

この邊は佳景である。月、雪、花、雨……この四邊は自然の變化が、東山八景を作つてゐる。

常樂寺もその一つで、春の曙は殊によい。

それは寂しい冬の夜であつた。

常樂寺の山籠をせららいでゐる小川に、洗ひかけた大根が冷く凍て、鉄のやうな下笠が鋭く光つてゐる。ひよつこり見知らぬ人がこの寺を訪れてきた。

「違ひ四圍の高知から弟子にして頂かうと思つて……」

常樂庵主人

とその男は五ふと、火の様な眼で私を見た。その男は一月程前、私の處へ僧侶にしてくれと手紙を寄してゐた。私は宗教家の仕事の困難なことを説いて、斷念するやうに云つてやつたのだつた。が、之を聞かずに尋ねて來たのだ。

私立大學を卒へた後、滿洲、西伯利亞の曠野を廻つたことがあるといふ廿七の男盛りで妻と子供に死なれたのが、彼を僧侶にならしめたいと願ひさせたのだ。熱誠を西に澄らし弟手入りを願つた。

「妻子の菩提を弔ふのなら、今迄の生活で信心をすればいいではないか」私は詳しく僧界の實狀の腐つてゐる事を語つて、更に斷念を勧めた。けど彼は、私と彼とが共扶んでゐるストリアの火よりも熱意を尊めて、未だ一步も譲らなかつた。

私はまけてしまつた。そんなら、これから三

十年が四十年、いや一生運命さまの爲めに勤めて、日に夜に有様の人々を説いて、死ぬるまでになつた一人でも救ふことが出来たら什麼に尊いことだらうか、そこに僧侶になる目標を置けば、出家の意義があると思ふ」

私はしんみりさ信仰生活を説いたのであつたが、彼は「出家を許す」といふ言葉だけを聞いたもの、やうに、憧憬れるやうな瞳で出家して寺へ入れば友達が澤山の金を寄附してくれるとか、高知に止れば大きな教會を建てるとか、頗る景氣の好い話を喚び立ててゐた。私が眞剣に話したことは彼には徹底しないやうなので、私は佛様の眞實に有難いことと信心の功德のどんなに尊いかとをしみじみと語つてその夜は眠らせた。

「よく今晚考へて置きなさい」

と云ひ残して私も眠つた。

翌朝、自分はこの男と話し合ひたいといふ氣持になれなかつたので、自分のその日の仕事をやつてゐた。お晝頃、この男は「停車場へ荷物を取りに行つてきます」といつて寺を出て行つた。

けど、その男は、もう寺へは戻つて來なかつた。

加賀の釜屋で十六軒の檀家と若い僧が本堂を建立した事は、前月號に報導したが、その後その小僧から話を聞いて、その本堂の建つたのは不思議でもなんでもないことがわかつた。

小僧は釜屋へ行つてから三年になるが、檀家の葬式があると「お寺がお葬式をするのはあたりまへのことです」といつて、貧富に拘らず、そのお布施を断つたさうだ。

けど、彼は宣傳の費用にも、一日の生活にも困らなかつたといふ。

熱念を起したのもなかつたらうけれども、廿才に滿たぬ小僧が、十六軒の檀家を動かすには充分の力があつたらうと思ふ。

x
或人が私に云つた。

「貴方は、有爲の材があつても、それを使はないではないか」

と。けど、私はそれを首肯するわけにはいかない。私は人を使ふのではない、私の願つてゐることは、私と一緒に、手をつないで働く人を求めてゐるのである。

孤獨明徹の士もある。大雄釋家もある。其

の士もある。けど、私は夫々の人々の技能をどうしようとも思はない。

私の仕事を一緒にして貰はふと思ふ人は、信仰の爲に全部を奉仕してゐる人であらねばならぬ。

百圓の収入のある僧侶がその支出を完了して剩餘金が五圓あつたとして、その五圓を佛様のために寄附したならば、その人は有徳の僧と云はれるかも知れない。

けど、私は未だ、この人を求めたいとは思はない。佛様の爲なら、自分の収入全部を出して、空腹も、寒さも意に介せず働かうといふ人を得たい。食はずにでも道を弘める人どんな苦しい仕事でも佛様の爲に働く人であつて、初めて末法に佛様の教は宣傳出来ると思ふ。

名古屋の浄教婦人會員が、寒夜に襦袢をバケツに濡らして、何千枚の宣傳ポスターを街頭に貼り出掛け、一夜の中に、名古屋市の日蓮主義化してしまつてゐるのを見るさき、何ものがこの大偉業を爲さしめるのであらうと考へる。

一介の婦女子の手が、繊細な彼女等の指がこの大きな仕事を敢行させるのは、信仰たゞ

これより生れる力ではないだらうか。

私は人を使用するのではない、私は人と一緒に道の爲めに働きたいのだ。一緒に働いて貰はふと思ふ人、それは信仰のたゞ一念、佛様の爲め的心、たゞ一心の人であらねばならぬ。

「君は有爲の材があるのに、何故用ひないのか」
といつた人の言葉は、私には何んとも感ぜられない。

私は合掌して佛さまを仰ぎ見る時、佛さまの慈悲深く大きいことと、そして自分の非常に小さいこと、をしみじみ感じる。

小さい者が、何萬何千萬とひしめき合つて働み苦しむ、聞えてゐるのを見ると、私は佛様の慈悲をこの憐れな人達に教へてあげようと思つて、私の身体の内では燃えて、*ロ〜と涙がこぼれてくる。

私と同じやうな持の人、それは私の友であり、私と一緒に仕事をする人であるのである。

記事

神戸市にて

國民精神作興講習會

多日生現下

二月七日午後七時より兵庫小學校大講堂にて神戸市湊川署管内民警懇談會主催、國民精神作興大講演會を開く、會するもの二千、智識階級及び有産階級を網羅す、講師と講師左の如し。

「詔書捧讀」高見湊川警察署長。

「詔書を拜して」芝山第八旅團長

「民風作興に就て」平塚兵庫縣知事

「詔書と思想問題」大僧正本

信徒の結晶が莊麗な本堂を

豊橋から飯田へ三十五里の間に

初て建てられた日蓮主義の精舎

稀な大山火事に約三千町歩を焼いた三河の風來寺から、更に山奥

散會後香羽花壇に講師を招して幹部主催の懇親宴あり、歡談の中心風作興の方策に關する意見を交換し、十一時半全く宴を閉す。

△二月十日 兵庫縣美濃郡志遠村小學校同窓大會を開き、會する者七百餘名。生活の改善に就て「經會議員藤田昌一氏」「自治」辨護士濱野法學士「民風の作興」縣會議員上田實氏「國民精神の振作」統一團支部長齋井本光氏。

へ十里、信三の國境上津具村に日蓮主義の種が播かれた事は、何回と報導したが、それが遂に立派な本常寺と云ふ御寺になつて、去る二月二十六日新建の本堂に御本尊様を奉遷する事となり、名古屋から自分が出張して其の式典を舉行した。嚴寒には零下十七八度を見る事もある深山の奥も、珍らしい好天氣に、雪もなく、風もなく寒さも烈しからず、三里五里山を越えて集つた信徒で、約五十坪の本堂は溢れた。

貧乏な村で、金は殆んどありません、如何なる努力でも辭しません、入用な金は援助して下さい、最初發願者からの頼みであつた、承知はして、多少は手傳つたが、とても充分ではなかつた、どんな本堂が出来たのだらうと心配

しながら行つて見たのであつたが建てられた本堂は、山國ではあるが、柱は皆なすばらしい樺、天井から、敷鴨居、一切の造作はよくこんな立派な木をと思はるゝ、材料が使はれて居た。千五百圓は、現金で支拂ひました」と關係者は説明した、奇蹟だ、末代の奇蹟だ、少くも一萬五六千圓を要すべき莊麗なる本堂が、なせ千五百圓で建つたらう、木材は全部信徒の赤誠

に、縁故を辿つて篤志の寄進に集められたので、金で購はれたものは殆んどない、伐り倒して、こなし、山を越えて三里五里を運ぶ一切の勞力から、御寺の建つたのは小高い山の麓なんだが、山を崩して田を埋めて、約三百坪の平坦な地盤を作るのから、専門の技巧を要する大工を雇つた丈で、其他

一切の勞力は、總て信徒の尊い膏と汗で供給されたさうだ。……段々説明を聞いて居る内に、私の顔には涙が傳はつて居た。よくそんなにして下さつた」と謹んで御禮を云つたのであつた。

式を終つて、嶮路四里、田口町を朝七時に自働車は發する、早曉の薄暗路を辿る時、送つて呉れた發願者の一人は語りつゞけた。講中は皆んな貧乏でした、で、御寺

各地

名古屋地方

二月には縣會議事堂で自慶會主催の盛大なる講演會を舉行了た名古屋教壇は、三月には成果を收拾すべく十九日新榮町常徳寺書院で、本多親下の日蓮主義講演會を開いた、集るもの約六百名「最善の信

教報

仰」と題し二時間餘の講演があつた。

二月八日妙教婦人會例會、國友清水兩師講演△全二十四日橋會例會、國友講師を議長に信仰に關する會員の所見が交換された△三月八日妙教婦人會例會、全十日花ノ木町青年會、全十七日刈谷町長遠寺、全十八日四日市安樂寺に於て、何れも國友日無師の講演があつた。

は芽出度出來たのであります、一人でも金持が混つて居たら出來なかつたかも知れませんが、貧乏であつた其の代り實に熱心でした、皆んなの佛様に捧げた火の様な赤誠があの本堂を作つたのです」と。

(國友日無師)

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

△三月廿二日、統一團と妙教婦人會と連合の例月講演會を開く事となり、その第一回として新榮町常徳寺書院に開催された。最盛府抄を拜して、川崎教務部長の講演があつた。

